



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マンガ＜百合＞表象論
Author(s)	郭, 如梅
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第17040号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17040
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100093
Type	doctoral thesis
File Information	Guo_Rumei_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：郭 如梅

学位論文題名 マンガ〈百合〉表象論

本論文の目的

本論文は、〈百合〉と称されるマンガの作品分析を中心に据える。専門誌『百合姉妹』（二〇〇二～二〇〇四年、マガジン・マガジン）及び後継誌『コミック百合姫』（二〇〇五年～、一迅社）の関連作品を主な研究対象として、女性同性愛表象を含む「女性同士の親密な関係」がどのように戦前期の少女小説と一九七〇年代以降の少女マンガという二つの水脈を横断的に汲み取りつつゼロ年代において変容していったのかを究明するものである。

〈百合〉マンガの作品分析については、活字と図像の相互作用というマンガ媒体の特性から、物語内容と図像表現の双方からアプローチする。物語内容の分析では、少女小説の女性同性愛表象に関わる日本近現代文学のジェンダー研究を視座として、「女学校」の「少女」をめぐる「セクシュアリティ」、「恋愛・結婚・生殖」、「家族」、「母性」などの観点から〈百合〉マンガを読み解く。図像表現の分析では、さらに登場人物の内的な心象風景と、外的な運動表現に大別する。人物の感情表現という内的空間の描写は一九七〇年代の少女マンガにおいて、「性的な身体」というテーマを通して、コマ割りの重層化や時間的分節機能の停滞などの表現技法によって洗練化された。その心象風景の表現技法がどのように〈百合〉マンガの女性同性愛表象に用いられ、レズビアン・セクシュアリティを顕在化させるのかを解明する。また、身体の運動表現については、女性同士のセックスシーンを素材として分析を行う。少年愛ものに代表される一九七〇年代の男性同性愛表象と比較すれば、女性同性愛表象は性交渉に至らないという地点から始まった。〈女性〉役割の性的主体性を重視する〈百合〉ポルノグラフィの形成経緯と、〈百合〉ポルノグラフィに用いられる内的独白、コマの分配、背景の描かれ方、スクリーントーンや効果線の使い分けなどの表現技法を明らかにする。

研究対象の定義

〈百合〉という本論文の研究対象の定義について、その揺らぎが最も議論されている問題点である。先行論が手薄で学術的定義が不安定であるだけでなく、ファンダムの中でも〈百合〉の「約束事」である友情、家族愛、同性愛などの幅広い人間関係を概括しようとし、「女性同士の親密な関係」に止まっている。「BL（ボーイズラブ）」ジャンルと比較すれば、男性同士の性交渉において、ペニスの挿入によって「攻め／受け」の性役割分担を定型とするBLの定義に対して、〈百合〉の定義は極めて曖昧であると言える。

本論文における用語の定義

本論文では、〈百合〉、「女性同性愛」、「レズビアン」といった三つの言葉について、「女性同性愛」と「レズビアン」は同義語として扱うが、〈百合〉はそれとは異なるものとして定義する。〈百合〉作品と言っても、今野緒雪の少女小説・ライトノベル『マリア様がみてる』（一九九八～二〇一二年、集英社）では、女学生の親密さを描きながら女性同性愛を周縁化する一面が残っている。対して、『百合姉妹』に掲載されたマンガ作品では、女性同性愛関係を異性愛と対等で肯定的な関係性として描写する。要するに、〈百合〉コンテンツでは、レズビアンの性愛関係と、モノガミーの関係性に囚われない女性同士の親密さが併存している。ゆえに、性表現を基準として、「GL（ガールズラブ）」や「ガチ百合／ソフト百合」などの言葉が次々に作られてきた。ここで注目したいのは、女性同性愛表象の二分化が繰り返される問題点である。女性同性愛の二分化は、「真／仮」、

「友愛／肉欲」、「現実／虚構」などの区別の基準が次々に作られ、戦前期の少女小説や女学生文化から現代のサブカルチャーまでそれが及ぶ。それに対して、本論文は、「レズビアン」／〈百合〉の区別に内包される女性同性愛の二分化を再強化しないように、女性同性愛・レズビアンを含める女性同士の関係性をテーマとして描く、小説やマンガなどのメディア横断の作品群を、「〈百合〉表象」と呼ぶ。

本論文の構成

本論文は、三部構成・全九章から成る。

第一部「ゼロ年代〈百合〉表象の形成」では、〈百合〉というカテゴリーが定着したゼロ年代の前半期に着目し、専門誌『百合姉妹』に掲載されたマンガ作品の〈百合〉表象を考察する。表紙や目次などの組版から看板作品と見なすことのできる三作品（『春夏秋冬』・『ストロベリーシェイク』・『くちびるためいきさくらいろ』）を、第二・三・四章で取り上げる。一様にレズビアンの恋愛物語を描く三作品の共通点を通して、『マリア様がみてる』から戦前期の少女小説に専ら焦点を当てる先行論と距離を置き、〈百合〉マンガにおける女性同性愛表象の継承と断絶に焦点を定める。

第一章「少女マンガ同性愛表象史——一九七〇年代前後」では、戦前期の少女小説における女性同性愛表象の定型を参照しつつ、一九七〇年代前半の少女マンガの女性同性愛表象を考察する。山岸凉子の「白い部屋のふたり」（一九七一年初出、集英社）、一条ゆかりの「摩耶の葬列」（一九七二年初出、集英社）、池田理代子の『おにいさまへ...』（一九七四年初出、集英社）といった三作品を研究対象として、同時代や同作家による男性同性愛表象、竹宮恵子『風と木の詩』（一九七六～一九八四年初出、小学館）、山岸凉子『日出処の天子』（一九八〇～一九八四初出、白泉社）を比較しながら分析する。

第二章「ゼロ年代〈百合〉表象論——蔵王大志作画・影木栄貴原作『春夏秋冬』を視座として」では、〈百合〉表象における「BL」の表現定型からの横領を考察する。『百合姉妹』（全五号）二、四、五号の表紙は、蔵王大志・影木栄貴の名前が「BL界の黄金コンビ」の見出しと共に、他の作家作品より倍以上の広い誌面を占めた。その看板作家として掲載された読み切りの短編連作は、後に『春夏秋冬』に収録された。本作では、「攻め／受け」というペニスの挿入に基づく役割分担を横領し、性規範の非対称な権力関係の暴力性を露呈し、流動的なセクシュアリティの実践を〈百合〉表象として描き出す。

第三章「男性向け〈百合〉ラブコメディの形成——林家志弦『ストロベリーシェイク』を視座として」では、〈百合〉表象は如何に一九八〇年代前後の少年マンガのラブコメディの表現定型を、女性同性愛の恋愛物語に組み込んだのかを究明する。主人公の内面空間による女性同性愛的欲望の顕在化は、〈百合〉マンガの表現定型と捉えられる。その少女マンガから継承した定型を踏まえ、本作では少年マンガにおける発話や運動などの外面空間の表現技法を先鋭化させている。レズビアン・セクシュアリティに関わる感情表現の創出により、本作は専門誌『百合姉妹』・『コミック百合姫』の主力作品でありつつも、単行本のレーベルは、少年マンガへと変更された。ゼロ年代後半以降に注目される〈百合〉表象の男性読者層と併せて見ると、ラブコメディの形式を通じてジャンルや読者層の性差を横断した本作は、男性向けの〈百合〉ラブコメディの嚆矢と位置付けられる。

第四章「少女マンガにおける恋愛表象の再編成——森永みるく『くちびるためいきさくらいろ』を視座として」では、少女マンガの恋愛表現の定型はどのように〈百合〉表象によって流動化されるのかを明らかにする。一九七〇年代の少女マンガにおけるロマンティック・ラブ・イデオロギーの浸透に伴い、男女の恋愛物語の定型が形成された。一九九〇年代の少女マンガはその恋愛表象の定型をずらすものの、異性愛規範の転覆や逸脱に及ばない。他方、森永みるくは二次創作の経験を踏まえ、レズビアンの恋愛物語を商業誌のオリジナル作品として刊行した。後に『くちびるためいきさくらいろ』に収録された読み切りの短編連作では、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの土台である強制的異性愛が女性同性愛に置き換えられる。併せて、ホモフォビアやクローゼットに与えられるセクシュアリティ・マイノリティの精神的な苦痛が具現化される。異性愛規範への収斂を牽制しつつ、少女マンガの表現定型を用いる本作の〈百合〉表象は、レズビアンの対等な関係性を描き出し、恋愛表象の定型に流動性をもたらす。

第二部「〈百合〉表象の到達点」では、〈百合〉表象における明治期からの女性同性愛表象の継承と断絶を明らかにする。「姉妹関係」による女性同性愛的欲望の表出に加え、「女学校」という性別隔離の特殊空間と、「作中作」による重層的な演劇空間が〈百合〉マンガの紋切り型として用いられ、同時に女性同士の関係性でも生じる役割分担の強要などの問題点が露呈する。その女性同士の間の非対称性や性規範から逃れられない女性同性愛と向き合いつつ、既存の婚姻制度や固定的な家族編成のもとで、対等な関係性が多様に描き出されるさまを明らかにする。

また、田村俊子の『あきらめ』（一九一一年初出、大阪朝日新聞）に代表される「女性同性愛の断念」という戦前期の定型に対して、第二部で取り上げる〈百合〉マンガ、吉田秋生『櫻の園』（一九八五～一九八六年初出、白泉社）と志村貴子の『青い花』（二〇〇四～二〇一三年初出、太田出版）の登場人物たちは、異性愛規範への収斂に抵抗するが、必ずしも性的主体性の形成の象徴としてレズビアン・アイデンティティを選ぶわけではない。そのセクシュアリティの選び直しにより、キャラクターたちが「ヘテロ／ホモセクシュアリティ」の二項対立と、〈女性〉に課する恋愛・婚姻・生殖の義務から、解放される可能性が見られる。同時に、女性同性愛に限定されていない〈百合〉表象の射程も示されていることを論証する。

第五章「〈百合〉マンガにおける〈男性〉性の行方——吉田秋生『櫻の園』と志村貴子『青い花』との比較を通して」では、〈男性〉性の描かれ方を通して、女性同士の間の性役割分担を考察する。従来の〈男装の少女〉の定型は、女性キャラクターの容姿造形を通じて、異性との相違を示しつつ、ジェンダー・アイデンティティの形成経緯を可視化する。一方、〈百合〉マンガの〈男性〉性は容姿造形によるセクシュアリティ・アイデンティティの可視化という表現定型を用いず、女学生同士の間で要請される役割分担として描かれる。「姉妹関係」における上級生と下級生の非対称的な権力関係が露呈するために、下級生に割り当てられる〈女性〉役割の性的客体の受動性により、上級生の〈男性〉性が生み出される。

第六章「〈百合〉マンガにおける〈女性〉の再主体化——志村貴子『青い花』を視座として」では、〈男性〉性の検討を踏まえ、「作中作」である三島由紀夫の戯曲『鹿鳴館』（一九五六年一二月号『文学界』初出、一九五六年一月劇団文学座初演）における影山伯爵夫人・朝子役と、重層的に描き出される〈女性〉役割の主体性の形成経緯を明らかにする。

本章の内容は三つの部分に分けられる。一つ目は物語内容に着目し、ゼロ年代〈百合〉表象における明治期からの女性同性愛表象の定型の受容の分析を試みる。「一時期の性的逸脱」や「異性愛の通過儀式」として断念せざるをえない同性愛関係の定型に対して、本作はキャラクターの恋愛対象の選び直しを通じて、〈女性〉の性的主体性を描き出す。二つ目は本作の独自のマンガ表現に焦点を定める。作中作ではコマの分配を通じて、〈男性〉役割の演出描写の省略やセリフの順番の入れ替えが行われ、戯曲とずれる物語内容が展開される。それと共に、コマの時間的分節機能や相互作用が駆使され、時空間の転換、併存、置き換えなどの効果が描き出され、演出舞台上の重層的空間の技法が創出される。三つ目は、物語内容と図像表現の相互作用に基づき、作中作の〈女性〉の悲劇と重層的に描かれるキャラクターの性規範の彷徨を分析する。その作中作の演出内容と置き換えられる煩惱は、同性愛の失恋、異性愛の婚約解消、〈母〉との葛藤として順番に浮上する。性規範からも逃れられない女性同性愛を経験し、キャラクターは恋愛・婚姻・生殖の三位一体の規範性を認識し、〈産む性〉とされる〈女性〉性と向き合う。既存の婚姻制度の抑圧と対峙しつつ対等な関係性を追求するキャラクターの物語により、ゼロ年代〈百合〉表象はレズビアンのモノガミーの関係性を描くのみならず、〈女性〉役割にまつわる性規範の問題系への関心を示していることが明らかになる。

第三部「〈百合〉表象の拡散」では、女性同士の性愛表現に照準を定め、〈百合〉ポルノグラフィと、〈百合〉表象の「キャラクター消費」を考察する。〈百合〉ポルノグラフィは女性同士のセックスシーンを性的消費物とする一方、〈百合〉表象の「キャラクター消費」では、「萌え」というオタクの消費行為を通して、性的な表現をめぐる消費欲求と忌避が同時に見られる。作品内容に併せて、掲載誌の位置付け、読者層の性差、作品の刊行年などの創作背景の要因も考慮し、研究対象を選定した。

第七章「玄鉄絢『少女セクト』論——ゼロ年代における〈百合〉ポルノグラフィの再編成」では、玄鉄絢の『少女セクト』（二〇〇三～二〇〇五年初出、コアマガジン）を対象にし、異性愛男性の性的消費物である「エロマンガ」の〈百合〉表象の分析を試みる。専門誌『百合姉妹』と同

時期のゼロ年代前半に刊行された本作は、一八禁指定という「エロマンガ」掲載誌の特性によって女性同士の露骨で過激なセックスシーンが許容される。本作の独自性については、「ペニスは不要」という女性同士ならではの特徴を用い、「エロマンガ」やBLに描かれるレイプ表現定型を横領し、それらの定型に内包される男女の非対称性を転覆する。レイプの暴力的な性表現に加え、「ハーレム」定型が用いられ、女学校や寄宿舎の中で覇権的なモノガミーの恋愛関係とは異なる女性同士の「親密圏」が描き出される。このように、異性愛中心の家族編成に揺らぎをもたらす本作を、〈百合〉表象として評価する。

第八章「マンガ表現技法による〈百合〉ポルノグラフィの形成——森島明子『半熟女子』を視座として」では、ゼロ年代後半の専門誌『コミック百合姫』レーベルの統廃合という創作環境の検討を踏まえ、「身体コンプレックス」と「女性同士のセックスシーン」という二つのテーマに照準を定め、〈百合〉ポルノグラフィの表現技法を通時的に考察する。『半熟女子』（二〇〇八～二〇〇九年初出、一迅社）を対象とし、吉田秋生の『櫻の園』、津雲むつみの「Moonlight Flowers 月下美人」（一九八九～一九九〇年初出、集英社）、やまじえびねの『LOVE MY LIFE』（二〇〇〇～二〇〇一年初出、祥伝社）、蔵王大志作画・影木栄貴原作『春夏秋冬』、森永みるくの『くちびるためいきさくらいろ』、玄鉄絢の『少女セクト』という六作と比較しながら分析を行う。人目に晒される〈女性〉性への自己嫌悪感が、主人公の「身体コンプレックス」として、コマ割りの駆使により可視化される。定型的なモノガミーの関係性に即して、主人公は女性同士の性交渉を通じて、ミソジニーを乗り越えて身体コンプレックスから解放される。その「女性同士のセックスシーン」には、女性向けのマンガ作品で形成される静的な表現と、男性向けのポルノコンテンツに示される動的な描写が複合的に用いられる。肯定的なレズビアン恋愛物語がゼロ年代〈百合〉表象の定型として定着することに着目しながら、ゼロ年代後半の専門誌において、〈百合〉ポルノグラフィがマンガ技法として形成されることを論じる。

第九章「ゼロ年代〈百合〉表象におけるキャラクター消費の多重構造——なもり『ゆるゆり』を視座として」では、専門誌の動向によって表出される男性読者層と、「萌え」という言葉に集約されるオタク文化の消費欲求に照準を定め、なもりの『ゆるゆり』（二〇〇八年～初出、一迅社）を対象にしてゼロ年代〈百合〉表象の「キャラクター消費」の重層構造を解明する。「キャラクター消費」は作品群の「男性向け」／「女性向け」のカテゴリーに基づき、読者の欲望する立ち位置の相違により、〈男性〉オタクの美少女を性的客体として消費する「データベース消費」と、〈女性〉オタクの美少年の性愛描写を消費物として賞玩する「相関図消費」といった二つの定型に分けられている。他方、本作は「キャラクター消費」を用いて、女性同士を性的対象とする行為や女性同士の性交渉の想像など女性同性愛的欲望が描き出される。二つの定型の併存により、キャラクターの欲望する立ち位置と、関係性の性役割分担が柔軟化される。BL定型と異なる「攻め／受け」の流動化により、〈百合〉表象の「キャラクター消費」はゼロ年代後半で定着し、二〇一〇年代に増殖しつつ拡散されてゆくことを明らかにする。

本論文の成果

本論文は女性同性愛表象に焦点を定め、これまでほとんど研究対象とされなかった〈百合〉マンガに、日本近代文学のジェンダー研究の問題意識を照射して考察した。マンガのレズビアン表象については、ゼロ年代までの作品の少なさに加えて、先行研究は、一九七〇年代の少女マンガ作品と二〇一〇年代の男性向けの〈百合〉表象といった二つの時代に偏っている。本論文はその先行研究の空白を埋めるものである。また、日本近代文学の女性同性愛表象との関連性については、本論文は〈百合〉表象を戦前期の少女小説・少女文化との継承性において明らかにした。少女小説と少女マンガ双方の流れを踏まえたアプローチにより、〈百合〉と称されるセクシュアリティ表象をジャンルを横断して通史的に明らかにすることができた。